

一八八二年三月六日(月)

この境地に定着すれば真理より離れることなく

その人は至高最大の宝を獲たことを知る

ここに安定すれば

いかなる困難にも動揺せず

——ギター6・22——

#### 四度目の会見——ナレンドラ・ナート、バヴァナートなどと共に楽しく

翌日、三月六日も休日だった。三時頃、校長はまた行つて座についた。タクール、聖ラーマクリシュナは、あのいつもの部屋に坐つておられる。床にはマットがひろげである。そこにナレンドラ、バヴァナート、そのほか一人か二人坐っている。みな十九か二十の年頃の青年だ。タクールは笑顔で小ベッドの上にお坐りになり、青年たちと面白そうに語り合つておられる。

校長が部屋に入つてくるのを見ると、タクールは大声で笑いながら青年たちにおっしゃった。

「ホラ、また来たよ！ アッハッハハハ」皆も笑いだした。

校長は額ぬかずいて礼拝フレイムされた後、席についた。この前までは手を合わせて立つたままごあいさつした

のだが——英国式の教育をうけた人が皆そうするように——今日、彼はインド式の礼拝(プラナム)を実行したのである。彼が座につくと、聖ラーマクリシュナは、どうして自分が笑ったのかをナレンドラたちに教えて下すつた。(訳註、プラナム——聖者や師に対しての礼拝の意味を含めたインド式の挨拶で、両手をあわせて合掌し、ひざまずいてお御足みあしに触り、その手を自分の額に当て、また合掌するとても丁寧な挨拶)

「一羽のクジャクに、四時にアヘンを食べさせた。そうしたら次の日のちようど四時に、クジャクがやってきた——アヘン中毒になってしまったので、時間きっかりにアヘンを食べに来たというわけさ！」(一同笑う)

校長は、これは実にびつたりした言葉だと、しみじみ思った。家においても、夜となく昼となく、このお方のことを思っていたのだから——いつ会おうか、いつ会おうか、と。誰かがここに自分を引っぱってきてしまうのだ！ほかの場所に行くことなど、頭に浮かぶどころではない。ただもう、ここに来たいばかり！タクルはこんなふうには、青年たちと同じ年頃の仲間のようにかれらといっしょになって、大いにフザけたり冗談を言い合ったりしておられた。笑いの大波が盛り上がって——まるで、よろこび「歡喜を売る市場」に坐っているようだ。

校長は驚いてこの不思議な人物を眺めている。これが先日、三昧に入って、今まで見たこともないような神聖な愛の欲びに浸っていた人物だろうか？いまはごく当り前の人のように振舞っている、この人が？

この人は最初会った日、私に対して教訓を垂れて、叱りつけたお方なんだろうか？この人が私に

対して、「お前さんがどうして知識人なんだ？」とおっしゃったんだろうか？ この人が、無形の神も有形の神も両方とも真実である。と断言されたんだろうか？ この人が、神のみ真実であり、この世のことはすべて空しいものだ。と説教されたんだろうか？ この人が、この世では金持ちの家の女中のような気持ちで暮らせ。と言ったお方なんだろうか？

タクール、聖ラーマクリシュナは楽しそうにしておられて、時おり校長の方に目を向けられた。彼が黙然と坐っているのを見て、ラームラルに声をかけて、「ほら、これはちよつと年令としがいつているから、すこし考えが深いのだ。みんながこんなに愉快にしているのに、これは物も言わずに坐っているよ」とおっしゃった。校長はその時二十七才であった。

話をしているうちに、偉大な信仰者だった猿のハヌマーンが話題にのぼった。ハヌマーンの絵が一枚、タクールのお部屋の壁にかかっていたのである。タクールはこう言われた。「ハヌマーンをご覧よ。何という親愛パイヴァだったことか！ 金も、名譽も、五官の楽しみも、なんにも心に留めていなかった。ただ、神さまのことだけが心にあつたんだよ。水晶の柱から天上の武器を取りだして逃げようとしたとき、マンドーダリーがいろんな果物を持ってきて見せびらかした。果物が欲しくなつて下りてきたら、武器をすてさせてやるつもりだった。けれどもハヌマーンは判断をまちがえるような奴じゃない。

こう言つて――

私が果物に飢えてるか？

生まれた甲斐ある果物を 私はここに持っている

おまえたちにはバチ(罰)の実ばかり 残して私は行くんだよ

解脱の実がなるラーマの樹が 私胸には繁っている

万願成就のラーマの樹した下に 私はいつでも坐っている

欲しい果物はいつでも摘める

ほかの果物の話なんぞは 私は聞く耳もたないよ

おまえたちにはバチの実ばかり 残して私はサア行くよ

〔三昧境〕

タクールはこの歌をうたいながら、また三昧サマーヂに入られた！身じろぎもせず、目は半眼に閉じて、不動の身体！坐っておられる。——写真でみると同じお姿だ。信者たちは、つい先刻までふざけて大さわぎしていたのに、今は皆、視線をこの神秘的なタクールのご様子に集中して、つつしんで拝見している。三昧状態というものに、校長はこれで二回逢遇したわけである。相当の時間が経ってから、この状態に変化が起った。身体がゆるんできて、お顔に笑いがひろがった。感覚が再び戻ってきたのである。両目のはしから歓喜の涙を流しながら、タクールは、「ラーマ、ラーマ」とこの御名を発音されている。

校長はそれでもまだ心の中で考えている。この偉大な聖者が、男の子たちとふざけてさわいでいた

のか？ あのとときはまるで五つくらいの子供のようだったのに！

タクールは以前のように、普通感覚をとりもどされて、また、ごく当り前の人間のように振舞っておられる。校長とナレンドラに声をかけて言われた。

「お前たち二人で、英語で話をして議論してみろ。わたしは聞いているから——」

校長とナレンドラは二人ともこの言葉を聞いて笑った。二人は何かしら言葉を交わし始めたが、もちろんベンガル語で話した。タクールの前で議論などすることは、校長にはもう不可能であった。彼の主張をしていたさまざまな項目は、タクールの前でお慈悲によって一まとめになって鳴りをひそめてしまったのだ。それなのに今さら、どんなふうにして議論すればいいというのだろうか？ タクールはぜひ英語で議論してみると言い張られたが、それは実現しなかった。

あなたは不滅にして至高の大実在

宇宙の本源なる大御親おみおや

永遠の宗教ダルマの保護者なる大神

人類の記憶を超えた最古プルシヤの御方だと私は確信する

——ギーター 11・18——

内輪の信者と——私は何者？

五時になった。信者たちはそれぞれの家に戻った。校長とナレンドラだけが残っている。ナレンドラは吸口のついた水差しを持って、白鳥池とジャウタラ（松林）の方に洗面のために行った。校長は庭園のあたりをあちこち行ったり来たりしていた。しばらくしてから、館の横を通って、タクルの後に追って白鳥池の方へ行ってみた。みると、池の南の降り口のテラスに聖ラーマクリシユナが立っておられて、ナレンドラは水差しを手にして口をすすぎながら立っている。タクルは彼に言っておられる。

「ね、もっとたびたびおいでよ。つい最近、来はじめたばかりじゃないか！ 最初に話をしたあとは、誰でもしつこいほど通ってくるよ、新婚のおムコさんみたいに——。（校長とナレンドラ笑う）ね、来てくれるね？」

ブラフマ協会の会員であるナレンドラは笑いながら答えた。

「ええ、そうするように努力いたしましょう」

三人は館の前の道を通ってタクルの部屋に戻った。宿舍のそばでタクルは校長に言われた。

「ほら、農夫が市場に牛を買いに行くだろう。かれらは良い牛と役に立たん牛を実によく見分けるよ。シッポの付け根に手をあててみるんだ。牛によってはシッポにさわると坐りこんでしまうのがあるが、そんな牛は買わない。シッポにさわられるとイライラして、跳びはねる牛を選ぶのだ。ナレンドラはそういう牛みたいでね、気力に満ち溢れているのさ！」

と言われてタクルは大笑いされた。

「ところが、おやつに食べるミルクに浸した揚げ米みたいに固さも力こじもなくて、さっぱり歯ごたえのない人もいるしね」

夕方になった。タクールは神を念じておられた。校長に向かって次のように言われた。

「お前、ナレンドラと話をしておいで。どんな青年だか、私にきかせておくれ」

神殿では夕べの礼拝(アーラティ)が終わっていた。校長はかなり経つてからチャドニーの西岸でナレンドラをみつけた。二人は語り合った。ナレンドラは、自分はサーダーラン・ブラフマ協会(サマ)(普遍協会)の会員で、大学で勉強していることなどを話した。

夜になった。校長はもう家に帰らなくてはならない。けれども、まだ帰りたくない。それで、ナレンドラのそばからはなれて、聖ラーマクリシュナを探しにでかけた。あの方の歌を聞いて胸も心も魅いられてしまい、是が非でも、もう一度あの神々しいお口から、歌を聞かせていただきたいと願っていたのである。あちこち探しているうちに、大実母カーリーの神殿の前面、舞堂(ナト・マディル)の間を、独りでタクールが散歩しておられるのをみつけた。大実母の神殿では、大実母カーリーの両側に灯明がかがやいている。弱いほのかな明かりだ。光と闇の交錯のかげんで、舞堂(ナト・マディル)がこんなに大きく見えるのだろうか。校長は、タクールの歌を聞いて我を忘れてしまったのだ。呪文に魅入られたへびのようなものだ。すこし遠慮がちにタクールにうかがってみた。

「今日はどう、お歌いになりませんか?」

タクールは考えて、

「いや、今日はもう歌わないよ」とおっしゃった。話しながら、ふと何か思い出したようにつけ加えた。

「では、こうしたらいい。私はカルカッタのバララームの家へ行くから、お前もおいで。そこで歌うつもりだから」

校長「そうさせていただきます」

聖ラーマクリシュナ「お前、知ってるのか？ バララーム・ボースを」

校長「いえ、存じません」

聖ラーマクリシュナ「バララーム・ボースだ。ボスバラに家がある」

校長「わかりました。聞きながら参ります」

聖ラーマクリシュナは、校長と連れだつて舞堂ナト・マンディルのなかを歩きながら、

聖ラーマクリシュナ「そうだ、お前に聞きたいことがある。お前、私のことをどう思う？」

校長は黙っていた。タクールは再び聞かれた。

「お前は どう思う？ 私は幾アナの智識を持っているかな？」（訳註——十六アナ＝一ルビーなので、一ルビーを100%として、何%になるかをアナの数で聞いている）

校長「クアナブレ・マクテの意味が私には理解できないのですが、しかし、このような神ジュニヤーナの智識ジニヤーナと云いますか、信ブレ・マクテ愛ブレ・マクテと云いますか、あるいは信念ヴアイライギヤ、即神離欲ヴアイライギヤと云いますか——このように高い靈性おかたの御人格おかたに、私はいまだかつてお目にかかったことがございません」



タクール、聖ラーマクリシユナは笑い出された。

こんな会話の後、校長は一礼しておいとましました。正門から出て行って、ふと思いついたことがあった、まだ舞堂ナトマンデルのあたりに居られるタクール、聖ラーマクリシユナのもとへ戻った。

タクールは例のやわらかい光のなかで、独り散策しておられた。ただ独り、他には誰もいない。百獣の王者ライオンが、密林のなかを我がもの顔に徘徊しているような感じだった。満足しきって——獅子は独り住み、独り歩くのを好む！ 唯我独尊わいがどぞん！

校長は驚嘆の眼差しでこの偉大な魂につくづくと見入っていた。

聖ラーマクリシユナは校長に気づいて、

「また戻ってきたのかい？」

校長「ハァ、あの一、富豪の邸宅でございましょうから、私なんぞがうかがってよろしいものかと——行かない方がいいと思ひまして。私はこちらにうかがって、あなたさまにお目にかかりたいの  
でございませう」

聖ラーマクリシユナ「何を言ってる。どういうわけだ？ わたしの名を言え！ その方のところへ行くのだ、と言えはいいのだ。そうすれば誰かがわたしのところへ連れてきてくれるから」

校長は、「では、行かせていただきます」と申し上げて、再び一礼してお別れした。